

マイキャラ短編集

真銅一白

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

うちのマイキャラたちのすこしふしぎな日常のお話です。

目次

なほ、おんどりと入れ替わる	—	1
エメラルドトロツコハイスピード		
4		
Monster	—	8
ミラーインロックオン	—	11
クリスマスが今年もやってくる	—	15
ゴールドハンター・シャルドー	フオ	—
ビドウンニアキャピタル編	—	23
生命線がのびちやった!	前編	—
		28
生命線がのびちやった!	後編	—
		31

なほ、おんどりと入れ替わる

ボンヌ・レクチュール！私はトレット。今、たくさんのお友達たちとアイカツをやっているんだ。今日はお休みだからお散歩に来たんだ！あれ？あそこにいるのはなほちゃんだ。なほちゃんはヴィーナスアークのアイドルで侍になるために剣術の修行をしているかっこいいアイドルなんだ。おうい！なほちゃん！

「……？」

なほちゃんはキョトンとした顔をしている。すると私の足元におんどりが現れて私の足を優しくつついた。どうしたんだろう？

「トレットちゃん！」

あ、あの声はアースちゃんだ。アースちゃんもなほちゃんと同じくヴィーナスアークのアイドルで最近娘ができて母性がマシマシになったんだ。何かあったのかな？

「素は……なほが……おんどりと頭と頭をぶつけてその衝撃で入れ替わっちゃったら
し……の……!!!」

アースちゃん曰くなほちゃんが走っていたら小石に躓いてその場にいたおんどりと

でもなくなほちゃんだ。現在ブレイメンの音楽隊はナイル川縦断ツアーを行っている。アースちゃんはヴィーナースアークの力を使って現在ブレイメンの音楽隊を追っている。なほちゃんは戻れるのかはまだ、わからない。ちなみになほちゃん i n おんどりの方はヴィーナースアークの地下に監禁されている。でもいつか戻ると信じて、私たちは待っている。

エメラルドトロッコハイスピード

私、エメラルド。あきれ返るほど平和な緑の星からいろくんな色に魅せられて地球にやつてきたんだ。今日はそんな私のお話だよ。

「エメラルドちゃん！」

あの子はトレットちゃん。私が地球に初めて訪れたときに初めて友達になってくれた子だよ。どうしたの？

「実はね、めっちゃスピードが出るトロッコを作ったんだよ！うまくレールを作ればどこでも行けるし大分から東京まで10分で行けるよ！」

トレットちゃんはたまにこういうものをつくるんだ。すごく面白そうだな。乗ってみてもいい？

「あつ待ってまだ調節ができてないから今走らせたらずんでもないスピードが・・・」

ポチツ

ん？

ビュ—————ン

「あああああああああああああああああああああわやばいつてあ

!!!!!!

!!!!!!

れは調整が完了してなくて亜高速までスピードが出てしまうから並の人間が乗ったら一瞬で皮が破れて骨だけになっちゃうよ!!!止めないと!!!」

うわゝすごいスピードだゝ。私が地球人だったら一瞬でバラバラだったねゝ。ボタンを押しても止まらないし、どこか安全なところで飛び降りないと助からないねゝ。

「よし・バラエティにあるすごいスピードでぶつかつたときに使う立方体のスポンジを用意できた!これをトロツコの軌道で必ず来るこの地点に設置すれば・・・あつ!来た!」

あゝバラエティにあるすごいスピードでぶつかつたときに使う立方体のスポンジだゝ。でもこれで止められ・・・

ジュワツ

「あああああああああああああああ!!!あまりの速さにスポンジが一瞬で溶けたあああああああああ!!!」

その後もトレットちゃん様々な畏を使ったけどことごとく失敗したよゝ。落とし穴は速すぎて落ちないしゝスナイパト!!を雇ったけど弾が弾かれちゃうしゝ超えらんない壁もあつたけどぶつかつてぶつ壊しちゃつたしゝどうしよゝ。あゝ目の前は海だゝ。もうおしまいだゝ。

「エメラルドちゃん!!!こゝうなつたら私の胸に飛び込んで!さあ!ほら!ねえ!」

トレットちゃんの声だ。もう、それしかないよね。えくくく。

「グブウエツ!!!」

大丈夫? トレットちゃん?

「大丈夫・・・致命傷だから・・・大丈夫・・・トレット・・・反省の俳句・・・」

その後何とかトレットちゃんは一命を取り留めたよ。もう二度と考えもなしにトロッコに乗らないと決めたよ。

「なあアース、なんか降ってきてないか?」

「えっ、あれは何かし・・・トロッコ?!?!」

「うわああああああああああああああああああああああああああああああ」

翌日

「えく次のニュースです。昨夜、天空から降ってきた亜高速のトロッコがヴィーナズアークと衝突し、ヴィーナズアークが大きく損傷する事故が起きました。幸い人が一人も出なかつたみたいですが早急にトロッコの出所を追及するということです」

「ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ・・・」

M o n s t e r

私はダー・クルナ。エタコレに所属しているアイドルであり、カフェ・ルナティックナイトのマスターでもあるの。実は狼人間の末裔で満月の夜には……その血が目覚めて狼になるんだけど、血が薄まつてるせいか狼というよりネコのような性格になるみたい。ちよつと恥ずかしいからみんなには内緒ね。今日はそんな私の経営しているカフェ・ルナティックナイトに来たお客さんの不思議なお話になるわ。

ある日、私がいつもの通りコーヒーを淹れる準備をしているとお客さんが3人ほどやってきた。いらつしやいませく……ん？ 個性的なお客さんね。3人とも男の人で背が高く大きくて角刈りの人、シルクハットにマントを羽織ってる人、それと一番小さくて赤と青の帽子をかぶってる黄色い服の男の子という人たちだった。これって……どう考えてもあれよね？ 愉快で痛快な王子とその子分よね？ ということは私狼男粹なの？ 狼だけでも……するとシルクハットの男性は、

「すみません、トマトジュースはあるございますか？」

絶対そうじゃん……ドラキュラじゃん……ト○ビアの泉の司会の人っぽいもん……とはいえお客さんなのはお客さん。幸いトマトジュースもあったのでコーヒーカップ

一杯に淹れてあげた。今度は角刈りの男性が口を開いた。

「小生はブラック砂糖なしがいいです。」

待って、普通に喋ってる??? いやいやいや突っ込みどころ多いんだけど? まずフランケンだろうけど喋ってるし一人称小生??? あと語尾にだす??? 待って待って笑いを堪えないと・・・何とか私は頭の中にあつたつまらない話を思い出して笑いを堪えた。そして怪物くん(仮)は

「カレーくれ!!!」

と言った。絶対そうだよもうこれは怪物3人組よ。とりあえずカレーとコーヒーを出した。頭の中がこんがらがってるときに3人はこう言った。

「「トリックオアトリート!」」

あつ! そうか! 今日はハロウィンだったわ! びっくりしたく・・・まさかここまでしっかりした仮装でお客さんが来るなんてわかんなかったもの。

「いやくすみませんね。どうしても坊ちゃんやんが狼人間のところでこの格好をしたいっていうもんだからくにしてもフランケン、キャラ崩壊してるございますよ。」

「あつ、フンガー!」

「もう遅いだろ! まあそういうわけなんでお菓子を貰ったら次に行こうと思うぜ。カレーおいしかったぞ! また来るよ!」

とりあえず・・・何はともあれ喜んでくれたみたいでよかった。私は3人にお菓子を渡して少し休んだ。こういうお客もたまには面白いわね。

あれ？なんであの人たち私が狼人間の末裔って知ってたの？

ミラーインロックオン

ここが・・・ミラーワールド・・・

私はアイカツ。エタコレのアイドルの一人よ。今日は新しいアイカツが行われる世界、ミラーワールドの中に来ている。これからのアイカツはこのミラーワールドの中に転生して行うらしく、今までの見た目や声が若干変わるみたい。この世界ではドレスシアと呼ばれる生物が住んでいて、そのドレスシアと契約出来たらドレスを着てライブすることができるといいたい。だからまずは自分と会うドレスシアを探さないといけないわね。うーん・・・だけど現実世界のアイドルとしての私って何となくクールビューティってだけでやってた気がするのよね。ただそれだけだと何か足りないし・・・一緒に来たクルナに私はどういうアイドルか聞いてみようかな。クルナ、ちよつと聞きたいんだけど私ってアイドルとしてどういうイメー・・・姿めちやくちや変わってない？髪紺色に染めてたよね？黄色に戻ってない？

「なんかこの世界だとうまく髪の色が反映されてないみたいね。声もなんか高くなってわね。まあ、今はこれで受け入れるしかないわね。」

そういうえばトレットもあの謎の塊が消えてたね。時がたてば戻るかもだけどとりあ

えず受け入れるしかないか。

「そうね。で、アイカ♪のイメージだっけ？そうね・・・やっぱりかっこいいアイドルってイメージはあるわね。そういえばこの間桜庭ローラさんと一緒にライブしたときのアイカ♪の格好、様になってたわ。意外とロックなんか合うんじゃないかしら？」

ロックか・・・確かにいいかも。ギター弾くのとか楽しいし。だったらそういうドレスアが・・・いた！ギターを持っててビートを刻んでそうなドレスア！あなた、名前は？

「私はブラッディロック。ロックに生き、ロックを愛するしがないドレスアさ。私になんか用か？」

私はアイカ♪。私、この世界でロック系アイドルとしてライブをしたいの！だから私に力を貸してほしいの！とはいえ始めたばかりでロックが何かよくわかってないけど・・・

「いいぜ。力を貸すよ。最初は何もわからなくてもいいさ。一緒に自分だけのロックを見つけていこうぜ！」

ありがとう・・・！ブラッディ！ドレスアの力を身にまとって・・・私のアイカッは・・・ここから・・・！

「アイカ♪、自分と相性のいいドレスアを見つけた・・・」

恥ずかしい……あんな……大声で……
ブラツディと私のアイカツは始まったばかり。前途多難だけど頑張っていこうと心に誓った。

クリスマスが今年もやってくる

今日は楽しいクリスマス！私はみんなの願いをかなえるために今年も地上に降り立った！今年是谁の願いをかなえようかな？えっ、私は誰かって？私はクリスマス。クリスマスの日だけに地上で活動できる精霊だよ。私には願いをかなえる力があつて願いをかなえると来年のクリスマスまでまた地上には降りれなくなっちゃうんだ。だけど私はみんなの笑顔を見るのが大好きだからぜんぜんさみしくないよ！．．．うん！

さてと、今年も地上に降りてきたけど相変わらずモミの木がご立派に立ってるなあ。これをクリスマスツリーにするんだけど年々クリスマスツリーを作る人が減ってるんだよね。これも技術の進歩ってやつだね。あれ？なんか4人くらいの女の子が来たよ？

「よし！私が作った世界最強の斧、斧D（おのでびるさたんぶれいかー）を使ってクリスマスツリーに使うモミの木を伐採しよう！」

「さすがトレットちゃんだね！ところで、それで斬った後はどうするの？」

「その後はこの超高速トロッコを使って事務所まで運ぶよ〜」

「確かそれってエメラルドちゃんに乗ってそのあとヴィーナスアークをめちゃくちゃに

「したやつよね?大丈夫なの?」

「大丈夫!今回は人知の限界くらいのスピードしか出ないようになってるしあの後なほちやんとアースちゃんに結構怒られたからかなり慎重に作り直したよ・・・」

「な、なんかすごい会話してない?」

「あれ?そこに誰かいるの?」

「!紺色の髪の子に気づかれた!えっえっと私怪しいものではございません」
「自分から怪しくないって言っちゃうんだ」

「一周回って怪しくないかもね!第一私宇宙人だし一番怪しいもん」

「宇宙人!?地球の精霊と宇宙人と人間3人ってどういう状況なの!」

「かわいい子だなく私トレット!」

「私はあさがお。」

「私はダー・クルナ、よろしくね。」

「私エメラルド」

「あつ、なんかふつうに自己紹介になってる・・・私はクリスマスよ。メリークリスマス!

「もしかして!ビルドに出ていた心火を燃やしてぶつ潰すライダー!」

「それはグリス。」

「違うよトレットちゃん、パソコンを作るときに使うやつよ。」

それも 그리스。

「あさがお、違うわよ。この子はキリスト教を信仰してるのよ。」

それは 그리스チャンね。私はキリスト教じゃないわ。

「あゝこの間テレビで見たゝおネエの人だゝ」

それは 그리스松村さんね！違うわ！私は 그리스！ 그리스限定の精霊よ！

「「「 그리스マスの精霊？」」」

あつ言っちゃった。でもこの子たちと話すとき楽しいな。だから私はすべてを話した。

「じゃあ 그리스チャンにお願いするとどんな願い事でも叶うんだ。」

そうよ。だからあなたたちのお願いも叶えることができるよ。あとそのイントネー

ションだとまた 그리스ト教になるよ。結構私の名前いじり気に入ってるわ？

「お願い事かあ・・・私はトレットちゃん二人きりで1日中デートしたいなあ。」

「あれ？だけどお願いをしたら消えちゃうってことはあなたはもうなるの？」

次の 그리스マスまではこの地上に降り立ってないわ。だけど私はそういう精霊だから。

もう2000年以上はそうしてるもの。寂しさとかはないわ。

「そうなんだゝそしたらまた来年逢えたらいいねゝ」

それは無理よ。私が消えたら私の記憶は消えてまた来年には別の人のところに降り

立つと決まってるの。公平に願いをかなえるためにね。

「えー！そんなの嫌だ！せっかくなにかわいい子にあったのに！だったらお願い事しなければ消えなくて済むんじゃないの？」

え、え？！ただ私1日で消えるって約束だし・・・何より願いをかなえないと精霊冥利に尽きるっていうか・・・

「あつ！そういうえばゆつくりしすぎじゃない？もうすぐツリーを運ばないと間に合わなくなりそう！」

間に合わなくなるって？

「そういうえば言っただけじゃなかったわね。実は私たち、アイドルなの。今日はクリスマスライブを行うためにツリーになる木を探してたの。」

それでここまで来たんだ。ねえ、よかったら私も見に行つていい？

「もちろんだよ！今日だけってのはもったいないけど私たちのライブ見てほしいもん！行こう！クリスマスちゃん！」

私たちはトロツコに乗って事務所まで向かっていった。そして準備が完了してみんなは舞台の上に立っていた。

「みんなく！！！！メリー！クリスマス！！！！」

「今日は来てくれてありがとう！！！！今夜は素敵なクリスマスにしようね！」

「緑のツリーに鮮やかな色々とてもきれいだね」

「今日は満月じゃないけれど月は今日も輝いている！行くわ！」

そこからの時間ははつきりと覚えている。みんなが笑顔で歌っていて……それを聞いているお客さんも笑顔に……私が願いをかなえた時と同じような笑顔……私も……みんなに……！

えっ、歌いたいの？……もちろんいいよ！クルナちゃん、エメラルドちゃん！一緒に！

「みんなく今日は特別ゲストだよ」

「私たちの楽しいお友達、クリスマス！」

「みんなく!!!メリー!!!クリスマス!!!急遽ステージに立たせてもらうことになりました！クリスマス!!!これは私たちからみんなに笑顔のプレゼント、曲は We Wish You a Merry Christmas！」

ありがとう。私の無茶を聞いてくれて。

「全然大丈夫だよ！会場のみんなも笑顔で迎えてくれたし！」

あ、もうすぐクリスマスが終わる・・・消えちゃうんだ・・・だけど私は覚えてるから・・・全然寂しく・・・ないわけじゃないよ・・・いやだ・・・みんな忘れて私だけで覚えてるなんて・・・

「そんなの、私だっていやだ！どうにかならないの？」

だけどこれは・・・決まり事だし・・・あつ、最後にお願いを叶えてあげる。

「そのお願いだけど、あなたの願いはかなえられないの？」

えっ・・・

考えたこともなかった。人の願いをかなえるのが私のお仕事だと思ってた。自分の願い・・・

「トレットちゃんとのデートはなんとか強引にでも叶えるし、クリスマスちゃんのお願いを

かなえよう。」

「私もそれがいいと思うなく」

私のお願ひ・・・だつたら・・・私のお願ひは・・・！

それから1日がたった。そして今日から私たちの新しいお友達が増える！

「メリークリスマス!!!みんなに笑顔を届けるアイドル!クリスマスです!よろしくね!」

クリスマスちゃんのお願いは

『みんなに笑顔を届けるアイドルになってみんなとこれからも一緒に楽しく笑っていたい!』

ゴールドハンター・シャルドー フォービドウンニア キヤピタル編

キンキラリ〜ン！わたしはシャルドー！世界中にある金をたたくさん集めるために、今日も金の情報を集めてるんだ！金っていいよね・・・キンキラで・・・きれいで・・・見るものを魅了する素晴らしいもの・・・いっぱいほしい！

ということであたしが来たのがここ！図書館！さくて、金がいっぱい取れる山の情報はなかなあ〜？う〜ん・・・天空の城、豪族の古墳、宇宙アシユラ・・・どれもわたしが既に採掘しに行ったなあ・・・本を読みながらわたしは歩いてると、今まで来たことのない本棚に来ていた。読んだことのない本がいっぱいだったので、わたしは本棚から一冊の本を取り出した。するとあたりが光りだして・・・う、うわあああああああああああ！！！！！！

「」は・・・？

「あらあら、目が覚めたみたいね。」

声が出た方に目を向けると青と赤の長い髪の女の子が立っていた。あ、コスモちゃんだ。確かへいこーせかい? ってところから来て宇宙の秩序と平和を守るウルトラアイドルだったはずね。だけどなんでコスモちゃんがここに?

「シャルドーちゃん、あなたは禁書を開いてしまったの。その開かれた禁書の影響で、シャルドーちゃんのお願いが反映されちゃったのよ。」

お願い? 禁書? でも見たところ何も変わってない?!?!?! ようだけど・・・

「日本地図を見てみて。そうしたらわかるから。」

そういわれて日本地図を開いたらな、なにこれ?!?!?! 近畿地方が・・・金色になってる・・・
 なんで??? この間近畿地方は金でできてないっけ?!?!?! クルナちゃんに教えてもらったの
 に!?!?! クルナちゃんが嘘をついてた・・・って?!?!?! ト?

「違うわよ。近畿は金でできてないのは本当。これは禁書を開いてできたいわばパラレルワールドね。要は私たちは元の世界とは別の世界にいるってことよ。」

そ、それじゃあ私たちは帰れないの・・・? あれ? でもコスモちゃんはどややってこっちに来たの?

「あら、問題なく帰れるわよ。この世界に来るのは意外と簡単だったわ。」

え? そうなの?

「ええ。この世界の日本海を泳いで、右へ200歩、下へ256歩、左へ63歩進んでそ

ここで探検セットを使えばいいのよ。」

歩数さえ間違えなければ確実に帰れるじゃん!!!よかつた〜じゃあすぐ帰ろう・・・待つて?ここで取った金って持って帰れるの?

「ええ問題ないわよ。そういうと思つて近畿に行く新幹線の準備はできてるわ。」

やったあ!!!いっぱい金がとれるゴールドラッシュチャンスだわ!できる限り持つて帰るわ!

そして私たちは近畿へとたどり着いた。いやあすげえですわこんなに金だらけなんて最高ですわね!!!できることならここで暮らしたい・・・

「すごいよだれに口調よ・・・?でもここは異世界だからエタコレのみんなはいないし、それに仮にも禁書で作られた世界だから崩壊する可能性もなくなはないわよ。」

そ、そうだね・・・みんながいないのは嫌だし崩壊しちゃったら帰れないもんね。わたしはよだれを拭いて金を取った。近畿大学1棟分の金ぐらいなら持つて帰れるかな?

「う〜ん、 داشتたら強力ソルバーになるしかないわね。いくわね!」

そう、コスモちゃんは3つの姿がある。今まで話していたのが『慈愛のナイトムーン』という優しさの姿、そして今からなるのが・・・

「よし!!!近畿大学丸ごと持つて帰るぞ!!!おら!!!」

!!!

!!!

!!!!!!!

だったんだ・・・そう思いながら私は家に帰った。そしたらポケットに違和感があったので手を入れたら・・・き・・・近畿大学の金のエンブレム・・・！どうやら一部の夢は現実になったみたい。もしかしたら近畿にも金が残ってるかも・・・？そう思ったのでわたしは明日、近畿に行くことにした。

生命線がのびちゃった! 前編

「大変! 生命線がのびちゃった〜!」

この聞き覚えのあるかわいい声は、トレットちゃん。生命線が伸びたってどういうことかしら? それに、生命線が伸びるのはいいことじゃ・・とはいえトレットちゃんはデータ体だから不死身なだけだね。でも、私はトレットちゃんの手を見て驚いた。

「な、なにその長い生命線!?!」

その生命線は、手からはみ出て軽く10mを超えるような線だった。どうしてこんなことになったの・・・?

「どうやら私の身体、バグっちゃったみたい。朝から体重が異様に軽いしそのリソースが全部生命線にいつてるみたいなの! どうしようあさちゃん・・。」

そういうばトレットちゃん、以前にもバグを起こして「きゆうり」しか喋れなくなつた時があつたわね。その時ちようど愛暗子の部屋の収録だつたけど私たちでどうか切り抜けたんだつたわね。とりあえず・・。

「ライナちゃんのところに行こう。」

ライナちゃんはすべての医師免許を一発で取つた最強の医者にしてアイドル。だけ

どバグは病気なのかしら・・・？

「うん・・・さすがに私でもバグは専門外ね・・・」

やっぱり駄目だった。そりやそうだね。インターネットが壊れたんです！つて言いながら救急病棟に駆け込むようなものだよね。

「一応応急処置としては生命線を切ることでぐらいだけど・・・」

「えっ、そんなことできるの？」

「データ体とはいえ物理的な肉体なら手術することはできるわ。生命線も肉体ではあるから切ることは可能だわ。」

やっぱりライナちゃんはすごい医者だ。と思つていたら

「それはダメよ!!!」

この声は・・・ミチちゃん!?ミチちゃんは地面から忍者のごとく現れた。

「ミチちゃん、いつからそこにいたの!?!」

トレットちゃんがそう言う。当然の疑問だけどミチちゃんはそれには答えず私たちに言った。

「実は私は今日の未来を見たの。その未来は、トレットさんの生命線を斬つたら生命線に宿った生命のパワーが溢れ出してビッグバンが起るというものだったのよ!」

嘘!?と思ったけどそうだった・・・ミチちゃんは左目で未来を見ることができて、1

0, 20, 30日は未来を確定させ、6のつく日は最悪の未来、ミチちゃんの誕生日の5月5日は最高の未来、それ以外は五分五分で当たる未来が見えるんだったわ。そして今日は・・・8月26日!

「や、やばいじゃん・・・このバグ治るまで生命線を維持しないとイケないの・・・?」
私にもわかった。トレットちゃんの顔が青ざめるのを。かわいい・・・いやそんな場合じゃない。どうにかしてバグを直さないと・・・

生命線がのびちやつた！ 後編

バグを直すと言ってもどうすれば・・・エタコレのみんなの中にはコンピューターに詳しい子はいない・・・そもそもデータ生命体にそういった常識が通用するかわからないし・・・

「とりあえず・・・どうにか押し込んでみる？」

ライナちゃんがそう言った。確かにトレットちゃん曰く生命線にリソースが言ってるらしいからそれを体の方に押し戻せば何とかなりそうだけど・・・

「それね、私も試したんだけどどうにも戻らなさそうだし・・・しかもその時になんかパキツみたいな音が鳴った気がするんだよね・・・？」

パキツ・・・？え、もしかして生命線に亀裂が入っちゃったってこと・・・？

パチパチパチパチ

そういえばさつきから知育菓子のはじけるキャッヂデーみたいな音がするなって思ったけど・・・命のはじける音だったってこと！！！！

「な、なんか心なしかぐったりしてきた・・・ちよ^{!!}と横になるね・・・」

言われてみればおかしかった。いつも元気で笑顔のかわいいかわいいたレットちゃ

んが生命線が伸びてそれが斬れたらビッグバンごときで青ざめるわけなんてなかった。違っただんだ……! トレットちゃんの命は今も少しづつ漏れている!

「どうりで私普段より耳が聞こえるし力があるなど思ったわ。トレットさんの漏らして命が私に力を与えていたんだわ……」

だから地面から出てきたんだ……でもどうしよう! このままじゃトレットちゃんが死んじゃう! いやそれだけじゃない。もし亀裂が広がって生命線が真つ二つになったら、命が溢れてビッグバン……! トレットちゃんと世界が終わっちゃう!

「死ぬ……そうだわ! トレットちゃんには一度死んでもらいましょう!」

いきなり何を言い出すのライナちゃん!? その場にいた私たちは驚いた。でもライナちゃんがこう続ける。

「生命線ってことは要は命の長さを表すもの。つまり死んで次に蘇った時に生命線は適性の長さに戻るはず!」

確かにトレットちゃんは死んでもコンテニューができるから大丈夫だしそれしかないさそう……だけど恋……友達を殺すのは気が引ける……しかも仮にもトレットちゃんを殺すということは殺人。私たちはアイドル生命が断たれるだろうし、医者であるライナちゃんなら医師免許はく奪までされる。生命線なのに色んな人の命を奪うなんてなんて皮肉なんだろう……とそんなところに

「どうしたんだ？なんだこの長い線！何やってんだあんたら？」

たまたま通りかかったなほちゃんが見れた。こうなったら・・・

「なほちゃん????私を殺して!!!」

「は！はああ????いきなり何を言い出すんだ!?!」

なほちゃんも侍。侍は最悪人を斬ってもあまり重い罪には問われない。トレットちゃんを合法的に殺すにはなほちゃんしかない！

「事情は分かった。つまりこの生命線を斬らないでトレットを斬れば治るかもしれないんだな？ちきしょう不殺を心がけてたが世界のためにもこの刀を振るうしかねえな！」「生き返るってわかっているとはいえ死ぬのなんて久しぶりだし怖い・・・あんまり痛くないでね・・・?」

「無茶言うなよ。刀は斬れると痛いんだ。安心しろ、痛みは一瞬だ。」

「じゃあ、最期にひとと言言い残すね・・・もう生命線なんて、こりこりだ——————!!!」

ズバスア！

game over・・・

たくさんの0と1が空を舞った。トレットちゃんは死んだ。そして、紫の土管が現れ、トレットちゃんは生き返った。

「あ、やったあ! 生命線が戻ってる! ありがとうみんな!」

さつき殺されたとは思えないかわいい笑顔を振りまいたトレットちゃん。一方のなほちゃんは……

「どうして……ただ通りがかったただけなのに……人を斬らなきやいけないんだ……おんどりと入れ替わったり……あたしなんでこんな役回りなんだ……」

相当精神的に逼迫していた。ライナちゃんが病院へなほちゃんを運び、私たちは家に帰ろうとした。すると突然

「えっ……今未来が見えたわ……遠くない日にトレットさんが脱線事故を起こすわ……!」

なぜかミチちゃんの未来視が発動した。もしかすると漏れ命の影響で未来をもう一回見ることができたのかも? だけど脱線事故って……? とにかく今日は疲れたので解散した。

後日……

「大変! 感情線が伸びて、環状線になっちゃった!」

なほちゃん……ごめんね……